

仮庵祭が最も盛大に行われる終わりの日に、神殿の境内で教えておられた主イエスについて、イエスは何者か、キリストか、という議論が、巡礼者の群れの中から生じたことが40節から44節において報告されている。そして45節から52節においては、同じ議論がユダヤの権力者（宗教指導者）たちの間に起こったことが記されている。

先ずは、巡礼者たちの間に起こった議論について（40—44節）

その最初の反応は40節。 **「この人は、本当にあの預言者だ。」**

「あの預言者」という言葉は、1章20節以下で洗礼者ヨハネへの質問の中にも出てくる（21節）言葉として、当時のユダヤ人たちがキリストの来られる時代の特殊な人物として待ち望んでいたところの預言者であって、申命記18章18節に、次のように神様が約束しておられる。

「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。」

次の反応は41節。 **「この人はメシアだ。」**

預言者どころか**「メシア」**（キリスト、救い主）だと言い切る声もあった。これに対する反応。41節後半から42節。 **「メシアはガリラヤから出るだろうか。メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」**

更に、46節にある、祭司長やファリサイ派の人々が遣わした**「下役たち」**の言葉、**「今まで、あの人のように話した人はいません」**という反応もある。この下役たちの言葉は、要するに「あの人の話しっぷりを聞くと、あの人は普通の人間ではない」ということ。

以上のように、主イエスに対する群衆の反応は**「メシアだ」**と言う人がいるほどであった。主イエスに対する好意的とも言える上記の判断に至った原因として考えられるのは、一つ、31節の群衆の声から推測できる。**「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」**。つまり、主イエスのなさっている多くの業、それも非常に不思議なしるし、これを見て、人々は、キリストであってもなくても実質上同じだ、と言わんばかりに、主イエスへの信仰が芽生えた。

2つ目の原因は、40節に**「この言葉を聞いて、群衆の中には」**とあるように、主イエスの教えの内容である。主イエスが語っておられる教えの内容からみて、この方は、あの預言者かキリストそのものだ、と考えられたのである。

3つ目は、46 節で下役たちが「**今まで、あの人のように話した人はいません**」とやっているように、主イエスの教えの語り方は、尋常ならぬ権威に満ちていたのである。マタイによる福音書の言葉を借りると、「**イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである**」（7:28—29）。誰それ先生がこう言った、誰それ先生がこう書いている、というように伝統に訴えてではなくて、主イエスは直接神の権威をもって教える語り方が、ただならぬ人物であることを示した、ということ。

このようないくつかの原因から「イエスはキリストだ」という考えも芽生えて来たが、このような考えに相対する反応も出て来た。何が、どれが、主イエスが「キリストでない」という判断に至った原因となったのか。

41 節に「**メシアはガリラヤから出るだろうか**」とある。この「ガリラヤ」とは、6 章 42 節でユダヤ人たちが「**これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている**」とつぶやいたことにも通じるものである。「あのナザレの大工ヨセフとその妻マリアとその息子イエス」という素性のことである。それが「キリストはそういうところから出て来ない」という判断と結びついているのである。

事実からいうと、主イエスは、ガリラヤの田舎ナザレの生まれではなく、ダビデの町とも言われる「**ベツレヘム**」で生まれた。このことについてはマタイによる福音書とルカによる福音書が伝えている。

メシアに関し、当時、ユダヤに広く蔓延っていたのは 42 節にあるように、「**メシアはただダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出る**」という考え、信仰であった。このようなベツレヘム出身のメシアという信仰が、ガリラヤ出身のイエスと矛盾する、だからイエスはキリストではあるまい、という議論になり、これは今日の最後の 52 節にあるように、ユダヤの議会の声でもあった。「**よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる**」（52 節）。

もし、この時、群衆やユダヤの議会の人たちが「**ニコデモが言った**」「**我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめた上でなければ、判決を下して葉ならないことになっているではないか**」という言葉通り、先入観や妬みなどを捨てて、主イエスから直接、それも素直に事情を聴いたならば、どうなっただろうか。ユダヤ人たちは「**事実を知ろうとしなかった**」のである。

参考までに、「**メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてある**」と 42 節に語られている「**聖書**」個所とは、旧約聖書ミカ書 5 章 1 節である。そこにはこう預言されている。

「**エフラタのベツレヘムよ、お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために、イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。**」

一方、52 節のユダヤの議会の人たちの言葉に問題点がある。それはイザヤ書 8 章 23 節後半にあるメシア預言を忘れていた点である。8 章 23 節から 9 章 6 節までは「ダビデの位」という小見出しがついているように、いわゆるメシア預言個所として有名なものである。

「先に、ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが、後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。」

因みに、新共同訳聖書では上記の御言葉は、8 章 23 節になっているが、口語訳聖書や NKJV や NIV などの訳では 9 章 1 節になっている。

この個所の「栄光を受ける」とは、9 章 5, 6 節に預言されているようにダビデの末裔から「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる人物が登場することにおいてである。

上記のことも含め、ユダヤの議会の人たちの生半可な聖書の知識は、ニコデモのめぐり出した言葉で、非常にはっきりしている。下役たちに対して、ファリサイ派の人々は「お前たちまでも感わされたのか。議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている」と高圧的に言う(47—49)。

これに対し議員の一人である「ニコデモ」(彼については 3 章 1 節以下、19:39 参照)が、「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか」という。「律法を知らないこの群衆は、呪われている」というファリサイ派の人々に対してである。むしろ「律法を知らない」のは「群衆」ではなくて、我々お互いではないか、という反論である。

出エジプト記 23 章 1—3 節には「あなたは根拠のないうわさを流してはならない。悪人に加担して、不法を引き起こす証人となってはならない。あなたは多数者に追従して、悪を行ってはならない。法廷の争いにおいて多数者に追従して証言し、判決を曲げてはならない。また、弱い人を訴訟において曲げてかばってはならない」とあるように、判決は決して偽りのうわさによってなしてはならない。

また申命記 19 章 15 節には「いかなる犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人の証言によって、その事は立証されねばならない」とある。

これらのことは繰り返し命じられている。それを今、ユダヤの議会の人たちは「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる」と言い切って、ニコデモ提案を握りつぶしてしまったのである。彼らは、ただ「聖書知らない」と済まされるような単なる無知ではなくて、わざと聖書に背くような仕方、聖書を黙殺したわけである。

以上のように、事実誤認やわざと知ろうとしない、また聖書をわざと黙殺するまでのかたくなさなどにより、主イエスを、メシア（キリスト）と認めることができなかつたのであろう。

最後に一つだけ確認しておきたい。それは、「預言者」、神様から遣わされてくる神の人というものを、人間の方からみて「ガリラヤからは出ない。あそこからなら出てよい」というように規制できるという考えは、大きな間違いだということ。神様のなさる事に対して、人間が神を留めて、「ガリラヤは相応しくない。ユダヤの方がふさわしい」というように、神様を人が指図できるという考えは危険である。

神の主権性、神の自由、これを本当に信じる者は、ひょっとすれば神は、暗闇のガリラヤからも神の人を起こしてくださるかもしれない、ひょっとすると神は、これらの群衆の中に、私の知らない真理を聞かせてくださるかもしれない、という恐れと慎みをいつでも持つことが肝心であろう。

「お前たちまでも感わされたのか。議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている」と「律法を知らない、群衆」と「律法知っている自分たち」を区別し、その「群衆は、呪われている」と言っている限り、主イエスがメシアであることを知るには至らないであろう。